



【外国人インタビュー】 15

Interview



もうすぐ^{ハタチ}20才。パラ陸上^{つよし}*1や仕事を通して力をつけていきたい。

岡本 ロドニー 毅さん

(日系ブラジル人)

今年3月12日(日)に、「パラ駅伝 in TOKYO 2017^{*2}」(日本財団パラリンピックサポートセンター主催)が駒沢オリンピック公園陸上競技場で開催されました。「かわさきパラムーブメント」川崎市チームの第3区車椅子ランナーで、昨年に引き続き2回目の出場となった岡本ロドニー毅さんにお話をうかがいました。

パラ陸上をはじめたきっかけは何ですか？

神奈川県立中原養護学校・高校3年生の時、体育の先生に勧められて車椅子陸上の50メートル走と1500メートル走をやってみたのがきっかけです。それまで陸上経験はなかったのですが、短距離で良い記録がでて、「メーヴェ陸上クラブ」(川崎市障害者陸上競技クラブ、通称:メーヴェかわさき)のコーチや川崎市身体障害者協会の会長に誘われました。スポーツはもともと好きだったので参加したのですが、とても体力がついたと思います。

来年は全国大会出場を目指しています。もちろん、2020年の東京オリンピック・パラリンピックも目指していますが、なかなか難しいです。

今は月2回、「メーヴェ陸上クラブ」の練習に参加していますが、それだけでは足りません。毎日練習できる環境を整えることや、競技用の車椅子を個人で用意することは無理ですね。やればやるほどお金がかかるので、いろいろな面でのサポートが必要になるんです。

今後の目標について

僕はもうすぐ20才になります。高校卒業後は、「川崎市わーくす川崎」(就労移行支援施設・川崎区)で就労トレーニング(2年間)をして、就職を目指しているところです。

現在は手先を使う作業(郵送物に入れるクッション材の製作・チラシ折り・封筒入れ)をやっていますが、僕の事は周囲から高評価をもらっています。実習を始める時に、父にも言われたので、「絶対に最後まで通う!!」という気持ちで無遅刻無欠勤です。スタッフの方にも褒めら

れますよ。自宅のある多摩区から施設までは、電車の乗り換えが大変なので、一人でバス通勤しています。

就職したら、貯金もして、グループホームに入り、自立したいと考えています。母は心配していますが、「1人でやってみたい」という気持ちがあります。今、川崎市内のグループホームには空きがないので、市外でもいいかなと思いますが、ここで陸上を続けたいので悩みます。

日本とブラジルの生活の違い

僕は日本生まれの日本育ちなので、あまりブラジルのことは詳しくないんですけど(笑)両親とはポルトガル語(ブラジルの公用語)で話していますし、ブラジルには祖父母や親戚が多くいるので、定期的に行きたいです。今年5月には10年ぶりに家族でブラジルに行きます。

日本とブラジルの障害者政策は違うと感じます。ブラジルは道もでこぼこで、車椅子で通るのは大変です。

最後に読者にメッセージ

車椅子陸上にもっと注目してほしいし、見てほしい。メディアにももっと取り上



げてほしい。いろいろ不安があるけれど、みんなの応援があれば強くなれるから…

等々力競技場サブトラックで練習中の毅さんは、とても速くてビックリしました。練習後にもかわらず、ご両親と一緒に快く話してくれた毅さんを応援したいです。

(取材・文:編集ボランティア 青柳尚子)

(写真:岡本ロドニー毅さん提供)

※1 パラ陸上

パラリンピック陸上競技の略で障がい者を対象とした陸上競技。「パラリンピック」は、もうひとつの(Parallel)+オリンピック(Olympic)という意味。(公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 HP より)

※2 「パラ駅伝 in TOKYO 2017」

障害や競技の枠を超えた選手が一つのチームとして参加する駅伝。日本財団パラリンピックサポートセンターが2015年から開催。

